

ロード・オブ・ザ・リング

テモテ コール ファミリー・フォーカスジャパン理事

私たちの世界とは別の世界を想像してみてください。そこには、私たちの世界とは異なる大陸、歴史、言語があり、暦や夜空の星さえも異なり、人間のほかにも知性を持った生き物、小人、妖精、魔法使い、トロール、悪鬼、ドラゴンなどの、素敵な、あるいは恐ろしい生き物たちが住んでいるのです。また、この世界の住人で、「ホビット」と呼ばれる素朴な愛すべき小人を、想像してみてください。そしてその中の一人の若い無邪気なホビットが、善と悪との戦いの激動に巻き込まれ、世界の命運をその肩に背負っていく姿を。さあ、それがイギリスの作家、J・R・R・トールキンが作り出した「中つ国（ミドル・アース）」と呼ばれる空想の世界です。この世界を舞台に、持ち主には、悪によつて世界を支配する力が与えられる指輪をめぐるの壮大な物語が展開するのです。

トールキンは、一九四〇〜五〇年代の英国、オックスフォードにあった「インクリングス（暗示の意味）」という非公式の小さな作家グループの会員でした。他に著名なメン

バーでは、小説家のドロシー・セイヤーズや、「ナルニア国物語」などで有名なC・Sルイスなどがいます。会員たちは伝統的なキリスト教の様々な宗派の人々でしたが、キリスト教信仰の重要なテーマを、文学、特に物語を通して伝えようという情熱を共有していました。

「指輪」についての物語は実際は二つの本に分かれています。一冊目の「ホビットの冒険」では、ビルボ・バギンズという名の中年のホビットが冒険の旅に出て、魔法の指輪を手に入れます。指輪のそれまでの所有者は、ゴラムという名の邪悪で狂った生き物でした。指輪の力に助けられて、ビルボは、中つ国をドラゴンや悪鬼たちから救い出します。その後の物語は、「指輪物語（ロード・オブ・ザ・リングス）」三部作で語られます。ここでは、ビルボの甥のフロドが指輪を相続したものの、フロドの代になって指輪の邪悪な本性が徐々に明らかになります。かつてこの指輪を失った「冥王」サウロンは、再びそれを手に入れようと、フロドたちに追っ手を差し向けます。そこで、指輪を破壊で



きる唯一の場所(冥王が支配する国にある)へ、危険な目に遭いながら、この指輪を運んで行く役目、フロドにのしかかります。

この三部作の第一部「旅の仲間」の映画が、今年三月二日に日本で封切られました。ピーター・ジャクソン監督・制作で、ほとんどをニュージーランドで撮影されたこの映画は、文学の傑作の映画化によくあるケースとは異なり、ストーリーも細部も驚くほど原作に忠実です。また、その映像技術の水準では、映画史上、最高傑作のひとつと言えるでしょう。アカデミー賞に十一部門でノミネートされ、興行成績でも記録を達成したこともうなずけます。

しかし、この作品で一番重要なのは、トルキンが描いた四つの力強いテーマです。

第二のテーマは、善と悪との壮大な戦い、特に人を支配する悪と暗黒の力です。冥王は、世界の全てを支配しようとし、そこには救いの希望はほとんどありません。また、フロドの指輪は、私たち皆が直面する、自分の罪深い性質との各々の戦いを象徴しています。指輪がフロドをとりこにし、破滅に引き

ずり込もうとするのを見る時、私たちは自分の罪に引きずられ支配される自分の姿を見るのです。特に自分が秘にかかっている(ゴラムのことば通り)「い」とい「罪」によつて。

しかし同時に、目に見えない至高の力と計画があることが、物語の随所にかすかに暗示されています。それはおそらく闇の力よりも強く、絶望のまっただ中にあつても、歴史を救いに向かつて静かに導いていきます。この第二のテーマは、フロドが魔法使いガンダルフと交わす、あの邪悪なゴラムについての会話の中によく表れています。「バギンズという名のホビットが指輪を所持している」と、ゴラムが冥王に知らせたことを知った時の二人の会話です。

「それにしても、なんと恐ろしいことか!」と、フロドは叫びました。「……(中略)ビルボがああ機に、あの下劣なやつを刺し殺してくれればよかったのに、なんて情けない!」「情けないと? ビルボの手をとどめたのは、その情なのじゃ……(中略)これが情、慈悲じゃ……(中略)わしの心の奥底で言がするのじゃ。」

善にしろ悪にしろ、かれ(ゴラム:筆者註)には死ぬまでにまだ果たすべき役割があると。そしてその時が至れば、ビルボの情は多くの者の運命を決することになるかもしれないと……。少なからず、あんなの運命もな(瀬田貞一訳、評論社)

トルキンが、最も感受性の強い時期を、二度の世界大戦やヒットラーの隆盛とホロコーストの影響のもとで過ごしたことを思うと、彼が私たちに、人類のもっとも暗い時代にあつてさえ、愛と正義の神は存在し、歴史の流れを義の勝利へと導いておられるのだと伝えようとしたことが理解できます。

第三のテーマは、救い主キリストです。二人の登場人物を通して、興味深いやり方で表現しています。一人はフロド、もう一人は流浪の王位継承者アラゴルンです。フロドは「世の罪を取り除く神の小羊」を象徴しています。彼はイザヤ五十三章にある苦難のしもべで、人類の罪をこの場合指輪を背負って十字架に向かいます。アラゴルンは勝利の王として知られる「ユダ族から出た獅子」を象徴しています。

最後のテーマは、人の品性の大切

さです。これは、ビルボのあわれみを通してだけでなく、フロドと仲間のサム・ギャムジーとの友情を通して表されています。サムがフロドに対して、死に直面してさえも変わらない忠誠心を示すところは、物語の重要な場面のひとつで、読者は自問せずにはいられません。「サムのように、私は友人に対して誠実で献身的だろうか?」また、物語が進むにつれてフロドの品性が高まっていますが、試練がどのように人間の内面を成長させるかをよく表しています。

映画には、一部暴力的で恐ろしいエピソードも含まれているため、小さなお子さんには適切ではありませんが、全体としては、家族向けの優れた作品であり、小学校高学年の子どもたちやティーンエイジャーと、人生についての大切な事柄を話し合うきっかけとなってくれるでしょう。「ハリー・ポッター」には、倫理性に疑問が感じられますが、「ロード・オブ・ザ・リング」は、安心して推薦できます。続編の「二つの塔」と「王の帰還」も、いつまでも愛される作品になるものと信じて待ちたいと思います。